

カミーラ・フローリッヒ

24歳

身長 165cm

体重 53kg

BWH 89・57・91

フリーゲルツ王国第三騎士団・北欧連邦支部・第一連隊・第3小隊隊長、エミル中佐の副官。階級は大尉。大学卒業後、士官学校に進学。課程を、首席で卒業し、王国騎士団に配属される。高い知能と、運動能力を買われ、軍でも切れ者と評判の、エミル中佐の副官として、配属される。護衛と、秘書としての役割を与えられているが、掴み所の無いエミル中佐の、監視役としての、極秘任務も与えられていた。

性格は、勤勉で、真面目。冗談は一切通じず、滅多に笑う事は無い。根っからの軍人だった。そんな性格のためか、どこか不真面目な雰囲気常在に周囲に振りまいているエミル中佐に、当初は嫌悪感を露にしていた。軍人の家系に育ったカミーラは、隙があればサボリ、綺麗な女性を見れば声を掛け、オフには賭け事などにも行くエミル中佐を、軽蔑さえていた。彼が不祥事を起こそうとする度に、それをたしなめるのは、彼女の仕事だからだ。

『何故、このような男が……隊長などに』

エリート集団と名高い王国騎士団の、小隊とは言え、隊長クラスまで上り詰めるのは、容易な事では無い。カミーラの家系ですら、女で隊長まで出世した者は居ないからだ。自分では、こんな不真面目で軟派な男の階級にすら、手が届かないのだと思うと、殺意を覚える程だった。配属から、半年。体術にも長けたカミーラは、エミル中佐が職務怠慢をしている際は、手が出るまでになっていた。それは、東洋で言う所の、見事な『ボケとツツコミ』となっていた。

ある時、国境でちょっとした小競り合いが起きた。暇そうな第3小隊に、その鎮圧任務が与えられ、部隊は総出で、現地に赴く。そこで、エミル中佐の指揮能力の高さと、戦闘能力を知る事となった。伊達に、小隊長を務めるだけの事はあり、あっという間に、敵を蹴散らし、混乱を收拾させたのだ。侮っていた上司の、本当の実力を垣間見て、驚くと同時に、尊敬の念を抱くカミーラ。彼の部下達の、エミル中佐への信頼は絶大で、その連携の取れた部隊運用は、カミーラが今まで、見た事も無い程素晴らしかった。カミーラは、その実力を見抜けなかった自分を恥じた。

「中佐。自分はその、あなたを見くびっていました。あなたは…素晴らしい指揮官だ。考えを改めます」

「そうか。では早速、今度食事でもどうだい？」

「……………考えておきます」

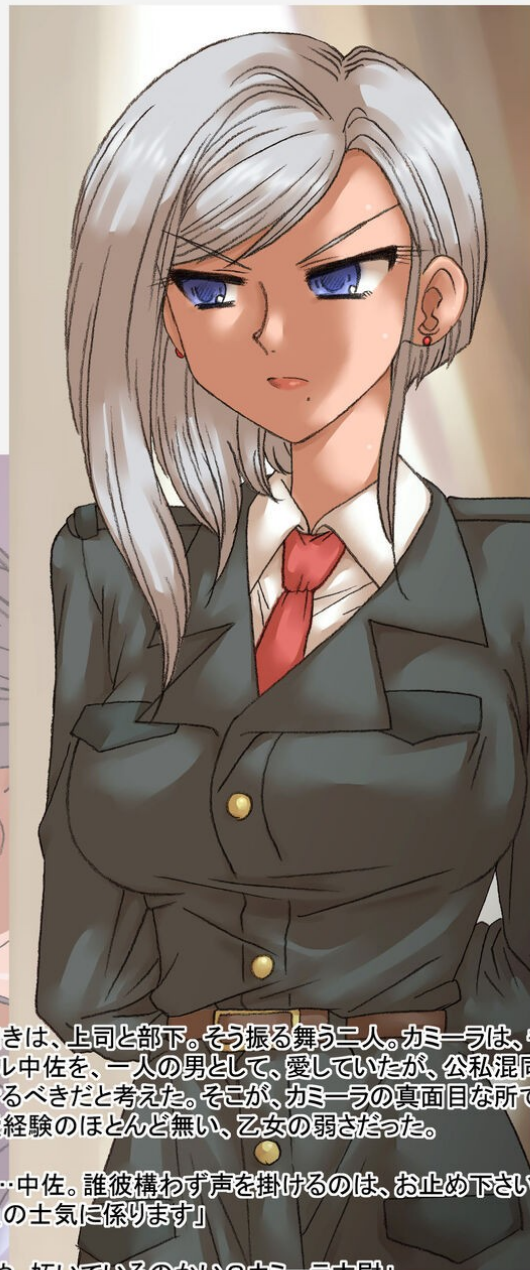
今までは、問答無用で無視していた誘いを、社交辞令でも、受ける素振りを見せるカミーラだった。



何度か、食事に行く二人。エミル中佐の、戦術論や、政治思想などに、興味が沸いて来たからだ。カミーラは、興味深そうに、その話を聞いて、感心していた。中佐は、自分とは違う次元に存在する男なのだと。どうりで、軍でもその存在を持て余している筈だ。中佐という階級にも関わらず、小隊長に甘んじているのも、危険な存在だと思われており、権限を与えないためなのだ。下手な事をすれば、政敵に消されかねない。それ程の存在なのだ。カミーラは、そんな中佐を、自分が守らなければいけない、と強く思うのだった。

二人が、肉体関係になるまでは、それほど時間が掛からなかった。エミル中佐は、美人と見れば、誰でも声を掛けるような男。そして、カミーラは、エミル中佐に尊敬の念を抱き、いつしか、命を捧げても良いとまで思うようになっていた。女が、一人の男に、そこまで入れ込んでいるのだ。深い仲になるのは、自然の摂理だった。カミーラは、エミル中佐に少なからず好意を持っていたし、女としての本能か、優れた男に、心惹かれる性質があった。いつの間にか、カミーラは、エミル中佐を、女として愛し始めていたのだ。そしてそれは、彼に抱かれる事で、決定的となった。

ある晩、一緒に食事をした際、珍しく飲み過ぎて、介抱された。そのまま、勢いでベッドへ。そのまま、5回も立て続けにセックスをしてしまった。正直、カミーラは、セックスが初めての経験だった。にも拘らず、猛烈に興奮し、まるで失われた半身を見つけたが如く、二人は情熱的に燃え上がり、全てを知っているかのように、お互いの肉体を激しく貪り合った。情熱的なキス。舌を絡め、手を繋ぎ、上に乗って、淫らに腰を振りまくる。口付けも、胸を見せる事も、男を身体の中に受け入れる事も、全てが初めてだったにも拘わらず、それは、あらかじめ運命付けられてたかのように、自然に受け入れられた。これが、自分の生れて来た意味なのだと、カミーラは、男の腕の中で、そう思った。



表向きは、上司と部下。そう振る舞う三人。カミーラは、もうエミル中佐を、一人の男として、愛していたが、公私混同は避けるべきだと考えた。そこが、カミーラの真面目な所であり、恋愛経験のほとんど無い、乙女の弱さだった。

「……中佐。誰彼構わず声を掛けるのは、お止め下さい。隊員の士気に係ります」

「おや、妬いているのかい？カミーラ大尉」

「……………」

鋭い切れ長の瞳が、殺意に彩付く。それまでは、ただ軽蔑し、呆れるだけだったが、今の彼女には、明確な嫉妬心があった。何せ、自分の女としての初めてを、全て捧げたのだから。怒る権利ぐらゐはある。キスだって、抱き締めたのだって、裸を見せたのだって、セックスをしたのだって、中に射精させたのだって、全ては愛する男のためなのだから。

「本気で誰かを口説こうなんて、思っちゃいないよ」

むっとしつつも、男の言葉に、頬を染めて恥じらうカミーラ。嫉妬に狂った自分は、女として、醜く弱い、と思った。実際、よく考えてみれば、中佐のナンパは、上手いいった試しが無いのだ。中佐は、一般的には、ぱっとしない男として有名なのだ。

「あなたのような男に、口説き落とされる女など、余程の物好きなのでしょうね」

皮肉を言うカミーラ。平静を装っているが、内心、心が躍るようだった。この男の魅力が分かるのは、自分だけなのだ。そう思うと、ゾクゾクする程、興奮し、そして幸せな気持ちになるのだ。これが恋をする事なのか、と思うカミーラだった。



「大尉。この後の予定は？一緒に食事でもどうだい」

誘われ、無表情で答えるカミーラ。あくまで、執務に答える、秘書官の体で。

「光栄です。ご一緒させて戴きます」

まるで、社交辞令のような、冷淡な声。しかし内心、嬉しくて、飛び上がるような気持ちだった。務めて、平静を装う。ここは、軍の施設内。執務室には、他に誰も居ないが、廊下にも、隣室にも、同僚が沢山居る。公然と、男に誘われて、喜んで見せる訳にはいかない。ぐっとこらえて、無表情を作る。口の端が、にやけるのを抑えるので、一杯だった。

「では、例の場所で」

そう言って、中佐は去っていく。カミーラは、ほっと一息つくと、そのまま椅子へと倒れ込む。動悸、息切れが凄かった。少女のように、はしゃぎ回りたいたい衝動を、抑える。

『ああ……早く、あの人を抱き締めたい。ぎゅっとして、キスしたい……！』

あくまで、無表情で、そんな事を考えるカミーラ。ここは、軍の施設内。どこに隠しカメラでもあるか、分かったものではない。スパイ行為も、任務として与えられているカミーラは、どこかで誰かが見ていないかと、不安だった。自分のキャラクターもある。男に誘われて、ニヤニヤしている所など、誰かに見られたら、自決ものである。

『何の服を着て行こうかしら……』

すっかりデート気分である。実際、デートなのだが。しかも、間違い無く、食事の後も、あるだろう。生理の周期は、教えたので、彼も知っている。今日が、生理では無く、それどころか、思いつ切り安全日である事は、お互い良く知っていた。

『中出しセックスをするんだわ……。あの人と、避妊具も着けないで……。直に繋がって……。セックスして……。射精……。！』

想像し、猛烈に欲情するカミーラ。我ながら、淫らだと思ふ。しかし、それが女という生き物なのだと、よく理解していた。カミーラは、学生時代は、常に成績はトップ。頭が良いので、人間の性質と言うものも、即座に理解出来たのだ。

『沢山、キスして貰うのよ……。手を繋いで。そう、私が上に乗るわ。あの人を……。熱い瞳で見ながら、いやらしく腰を振るの。私が、どれだけあの人を好きか、分かって貰うんだから……。！』

無然とした表情で、背筋を伸ばして、廊下を歩きながら、そんな事を考えているカミーラ。擦れ違う同僚達は、カミーラがそんな事を考えているとは露知らず、その凛々しく、堂々とした軍人としての姿に、敬礼するのだった。



「はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ！」

ぎし、ぎし、ぎし！とベッドの軋む音が、薄闇に響く。
仰向けに寝かされたカミーラが、男を受け入れ、
甘い声で喘いでいた。擦れる、低めの女性の声。
喘ぎ声は、抑えめで、それが、生真面目な彼女らしい、
羞恥を感じさせた。

「興奮するよ、大尉…」

言われ、潤んだ瞳を向けるカミーラ。『私も』と、その
瞳は、熱く語っているかの様だった。

「ああ……！」

激しく、腰を打ち込まれるカミーラ。勃起したペニスが、
カミーラの濡れた膈内を、素早く出入りする。亀頭の
摩擦が、女を快楽の高みへと誘う。凄まじい快感に、
カミーラは、背を仰け反らせて喘ぐ。ぱん！ぱん！と
いう衝撃に、カミーラの胸が、男のしている前で、
形を変えて、悩ましく揺れ動く。91センチの巨乳は、
それまで、誰の目にも触れる事が無かったものだ。
カミーラは、中佐が初めての男性だったのだから。

「いくよ、大尉……！」

冷徹なカミーラの、歓喜に甘く蕩ける様な表情。
美しく、淫らに男を誘惑する、大きく形の良い乳房。
それを同時に見て、一気に興奮の高みへと、上り
詰める。

「はい…！中佐…！そのまま、そのままあ……！」

膈内での、射精を懇願するカミーラ。いつもは、
避妊具を付けるか、外での射精だった。今回は、
安全日という事で、中出しをして欲しかった。好きな
男に、膈内で射精される喜びは、女にしか分らない。

「あああっ！！」

びゅくん！！という脈動と共に、動きを止める男に、
絶頂の射精を察し、愛しさが爆発する。男は、醜い
女には、勃起もしないし、射精もしない。好きな男に、
勃起され、挿入され、犯され、そのまま射精される。
それは、愛されているからに他ならないのだから。

「中佐…」

手の伸ばし、男の身体を抱き寄せる。切なそうに、身を
震わせながら、どくん、どくん、と射精を繰り返す、恋人。
上司としての尊敬より、男への愛情が、今のカミーラを
支配していた。

「ん……」

手を繋ぎ、唇を重ねる二人。絡み合う舌が、熱い想いを
伝え合う。カミーラは、愛しそうに、甘い声を出して、舌を
動かし、夢中でディープキスを繰り返した。



しばらくの間、繋がったまま、お互いの息の音を、耳元で聞いていた二人。やがて、ゆっくりと離れると、そのままベッドに横になり、身を寄せ合う。手を繋ぎ、男の肩に頭を寄せながら、カミーラは幸せを噛み締める。男と、裸でベッドに居る。今日も、通常勤務だった。明日も、仕事だというのに、こんな事をしている。少し前までは、そんな自分が、想像すら出来なかった。何せ、学生時代にも、恋愛などした事が無かったからだ。キスどころか、男と手を繋いだ経験すら無い。そんな自分が、あろう事か、職場の上司と、こんな関係になってしまうとは。相手は、15歳は年上である。男が20歳の時、自分は5歳だったのだ。信じられなかった。

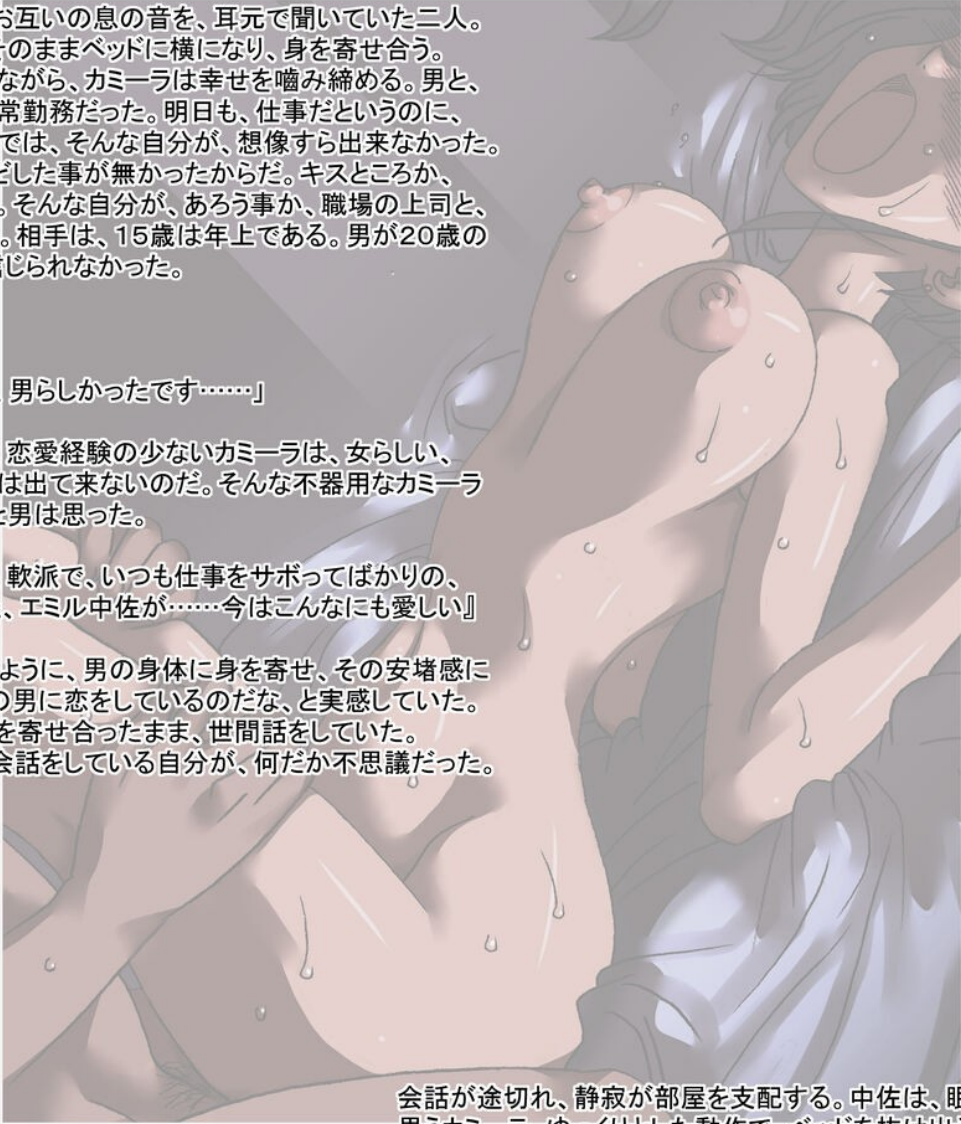
「今日も可愛かったよ、大尉」

「いえ……中佐こそ………、男らしかったです……」

そんな言葉しか、出て来ない。恋愛経験の少ないカミーラは、女らしい、気の利いた言葉など、即座には出て来ないのだ。そんな不器用なカミーラが、彼女らしくて可愛い、と男は思った。

『中佐……。あのだらしなくて、軟派で、いつも仕事をサボってばかりの、軽蔑して、馬鹿にさえしていた、エミル中佐が……今はこんなに愛しい』

カミーラは、夫に寄り添う妻のように、男の身体に身を寄せ、その安堵感に酔い痴れていた。自分は、この男に恋をしているのだな、と実感していた。二人は、そのまましばらく、身を寄せ合ったまま、世間話をしていた。生まれたままの姿で、そんな会話をしている自分が、何だか不思議だった。



会話が途切れ、静寂が部屋を支配する。中佐は、眠ってしまったのか、と思うカミーラ。ゆっくりとした動作で、ベッドを抜け出ると、少し水を飲み、そのままバスルームへ向かう。あれだけ激しいセックスをした後だ。もう全身は汗塗れで、股も、お互いの愛液で凄い事になっている。胸も、背中も、口の周りも、太腿や、腕や脚に至るまで、男の唾液で濡れた記憶がある。もう、身体を洗わないと、とても好きな男の前には、居られない。カミーラは、音も立てずに、浴室へと移動した。諜報活動の訓練を受けているので、隠密行動は、お手のものだった。

バスルームの明かりの、スイッチを入れると、男の影に、びくっ！とする。すぐ傍に、エミル中佐が立っていた。全く気付かなかった。

「…何で居るんですか」

接近に、全く気付かなかった。やはり、この男は油断ならない、と思うカミーラ。しかし、自分よりも優れた男である、と思うと、結構悪い気はしないカミーラ。女に入浴に、無断で侵入するなんて、と思いつつも、追い出したりはしない。恋仲なら、女の入浴に、男を伴うなど、当り前の事だからだ。両親ですら、そうだったのだから。『両親』という言葉から、『夫婦』という言葉を連想し、勝手に喜ぶカミーラ。まさに、恋する乙女状態だった。

「君の身体を、もっと明るい所で見たいと思ってね」

言われ、赤面しつつ、腕で身体を隠す。しかし、カミーラの女の細腕では、大きな胸を、まるで隠せない。かろうじて、乳首だけを隠すのに精一杯だった。

「見ないで下さい。私……あまりスタイルには自信がありませんので」

身体を横に向け、すすす…とバスルームの隅に逃げるカミーラ。実際、カミーラは、自分の女としての魅力を、過小評価していた。こう見えても、若い女性であるカミーラは、若者向けのファッション雑誌なども読む。そういった雑誌には、スタイルの良い(細身という意味)女性が沢山載っており、それに比べると、自分は筋肉質だし、胸も尻も大き過ぎる、と思っていた。男に一切関わらずに青春時代を送って来たカミーラは、男が、グラマーな女性を好むという事を、まったく知らなかった。

「こんなに綺麗なのに…？」

あっ、と思わず声を出すカミーラ。男の手が、カミーラの腰に、優しく触れていた。ぞくっ、と脚が震えるのを、我慢する。

「止めて下さい……」

ウエストから、ヒップへと移動していく手。そのいやらしい手付きに、痴漢！と軽蔑しつつ、同時に、無意識に喜ぶカミーラ。純然たる痴漢行為だというのに、ちっとも嫌じゃない。痴漢行為に喜んでいる自分。それが、信じられなかった。改めて、恋とは恐ろしいものだ、と実感する。

『やだ……中佐ったら…』

明るいので、はっきりと見える。中佐の股間のモノが、むくむくと大きくなっていく様が、手に取るように分かった。

『いやらしい人……』

カミーラは、そう思いながら、男の手によって抱き寄せられ、そのまま唇を奪われる。抵抗などしなかった。する理由など、一つも見当たらなかったのだから。カミーラは、口の中に侵入してくる舌を、甘い声を出しながら、絡め取った。



「はあ……、はあ……、あん……」

夢中で舌を絡めながら、身体を強く抱き締め合う。ハグとキスで、もう二人の性欲は、完全に燃え上がっていた。むにゅむにゅと尻を揉まれながら、腹部に感じる、男の固い感触に、猛烈に興奮するカミーラ。好きな男に、淫らに欲情される嬉しさ。これは、恋をしている女にしか分からない。

『こんな……大きなお尻に……欲情するなんて……っ』

コンプレックスである、大きなヒップ。バストよりサイズの大きい尻は、女として、凄く格好が悪いと思っていた。そんなものに、ここまで欲情し、ペニスを大きくしている中佐は、何て可愛いんだろう、と思った。

「愛してるよ……カミーラ」

「私も……エミル」

キスを繰り返しながら、愛の言葉を囁き合う。最初は抵抗があったが、二人きりで甘い時間を過ごす時は、気分が高まれば、お互いの事を、名前で呼び合うようになっていた。生真面目な軍人であるカミーラは、上官を呼び捨てなど、言語道断だと思ったが、いざやってみると、その興奮に、やがて夢中になった。好きな男を、名前で呼び捨てにする。それは、凄まじい快感だった。男の名前を呼びながら、愛撫し合うだけで、軽くイってしまいそうになる程である。カミーラは、初体験の後、オナニーを初めて覚えたのだが、相手の名前を呼ぶ、という興奮を覚えてから、声を抑えるのが、大変になる程だった。それ程までに、『好きな相手の名前を呼ぶ』という行為は、恋愛において、凄まじい快楽を伴うものなのだ。

『ああ……エミル、エミル……！愛してるわ……！』

尻を、胸を、荒々しく揉まれながら、カミーラ自身も、男の胸や肩、首筋にキスをし、舌を這わせる。手でペニスを優しく握り、その形を、固さを確かめるように触りながら、甘く、時には力強く、愛撫する。

『このペニスが……、私を……！』

指先に感じる、カリの段差が、カミーラを興奮させる。これが、この段差が、あの猛烈な快楽を、セックス時に、与えてくれるのだ。初めて見た時は、グロテスクで驚いたが、慣れれば可愛い、と思う。相手が、エミル中佐である場合のみだが。

「……はあ、……はあ」

二人の口が、離れる。背が高いエミルを、カミーラが子供のように見上げる。官能に支配され、潤んだ瞳で、愛しい相手を、熱く見詰めている。

『セックスするの……。いいわ……。して……？』

その目は、そう語っているかのようだった。

二人は、バスタブに移動すると、愛撫の間に溜っていた湯船に、ゆっくりと身を沈める。向かい合ったまま、暫く見詰め合った二人は、やがて頷き合うと、そのまま身体を重ね、自然に繋がり合うのだった。

「はあ……、はあ……、はあ……あん……っ」

ゆっくりと、時には激しく、繋がりが合う二人。
甘い快楽を貪りながら、愛の言葉を繰り返し、
口付けを交わし合う。そこに居るのは、上司と
部下では無く、二人の男と女だった。

「ん……………ああ……………」

セックスは、数分間続いている。湯船では熱い
ので、バスタブから出る。ガラス張りの壁に手を
付かせ、後ろから繋がる。突き出された腰に、
根元まで入るペニス。体奥まで達する、男の
ペニス。まだセックスを経験して間も無いが、もう
大人のカミーラは、奥も感じるようになっていた。

「はっ……、はっ……」

ぱんっ……、ぱんっ……、という音が、バス
ルームに鳴り響く。豊満な、大人の女である
カミーラのヒップは、その質量は大きい。僅かな
衝撃でも、大きな音を出す。その音が、『男に
犯されている』と感じさせ、興奮するのだ。

「んああんっ……」

後ろから攻められ、ガラスに追い立てられる
カミーラ。両腕を付き、バックの姿勢で、身体を
仰け反らせ、尻を突き出す。大きな乳房が、
ガラスにむにゅりと押し付けられていた。
ガラス越しに映る、若い女性の乳房は、独特の
フォルムを見せ、恐ろしく官能的だった。

「綺麗だよ、カミーラ」

「ああん……、あなたもよ……、凄い素敵……………」

している事は、淫らな行為。裸になり、身体を見せ
合い、触り合い、勃起した男のペニスを、濡れた
女の膣に挿入し、激しく出入りさせていた。軍規でも、
『不純異性交遊』は、固く禁じられていた。誰も
守っていないが、過酷なこの仕事、ストレス解消の
手段が禁じられては、クーデターが起きかねない。

「真面目な君が……、こんなにいやらしい女だ
なんてな……！」

「ああ…ん…、だって……、だってあなたが……」

自らも腰を振りまくりながら、官能を受け入れ、甘い
声を出す。軍人とは言え、カミーラは一人の女。恋を
知って、セックスの誘惑に抗える筈が無い。
ぱん！ぱん！ぱん！ぱん！
カミーラの言葉に答えるように、男は腰を激しく打ち
付けていく。

「あ……！あ……！あ、ああ……！す、好き……！
好きよ！あなたが好き！せ、セックス！もっと
セックスしてえ！！あああ——っ！！」

エミルは、カミーラの減多に聞けない、甲高い喘ぎ声
を聞きながら、その膣内に精を放った。



「おっ、大尉じゃないか」

声を掛けられ、むっとするカミーラ。嫌な所を見られた、といった表情だった。

「似合うじゃないか、その格好」

「……だから見られなくなかったんです」

馬鹿にされてると思い、機嫌が悪くなるカミーラ。ただでさえ、慣れない場所、慣れない格好に、居心地の悪さを感じているのだ。ここは、とあるホテルの祝賀会場。何だか良く分からない、何かのアレで、今日もパーティーが行われていた。基本、こういう場所には、軍のお偉いさん方や、大企業のトップなどが、参加するものなのだが。カミーラは、こう見えても軍でもかなり名を知られた、軍人の家系。たまに、こういう場所に、見栄のために、無理やり連れて来られる場合がある。いつもは、何かと理由を付けて、断っているのだが、今回はタイミングが悪く、逃げるチャンスを失った。故に、ここに居るのである。

「中佐こそ、何故このような場所に」

嫌味のつもりで言ってみる。エミル中佐は、こう言った場所に、好き好んで来るような男では無い。飲むのは好きだが、それは周りが友人ばかりの場合だ。お偉いさんなど、エミルを毛嫌いしているような小物ばかりなので、わざわざ煙たがられに来る理由が無い。

「君が来ていると聞いてね。面白いものが見れると思って」

きっ！とその切れ長の瞳に、殺意が宿る。出会ったばかりの大尉を思い出し、何だか懐かしそう中佐だった。

「馬子にも衣裳、とでも言いたげですね。……私とて、好き好んでこんな格好をしているのではありません。言うまでもなく、無理矢理着せられたのです」

こういった場所では、女はドレスを着るのが流儀だった。カミーラは、良家のお嬢様でもあるのだ。

「いや、良く似合ってるよ。これでは、男も放っては置かないだろう」

「御冗談を」

24歳まで処女だった女に、何を言う、と思うカミーラ。自分は、男にもでない方だと思っていた。実際、成績は常に首席で、運動能力も高い彼女に、近づく男は皆無だった。彼女の家は、地元では知らない者は居ない、軍人一家なのだ。敵に回すなど、恐ろしくて、誰にも出来ない。しかし、カミーラはかなりの美人で、彼女と抱きたいと思う男は、吐いて捨てる程居たが。

「皆、君を怖がって近づかないだけだろう。そんな怒った顔をしていては、男は気後れしてしまう」

「……私が不機嫌なのは、あなたのせいなのですが」

自分は、尊敬する中佐の、充実なる部下のつもりだった。こんなセレブ気取りの小娘のような、男を釣るための恰好をさせられて、偉い人の機嫌を取るために、軍人になったのではない。この姿は、中佐にだけは見られたく無かった。カミーラは、女として中佐を愛しているが、それは軍人としての忠義があるからだった。尊敬する相手ならば、命だって捧げる。勿論、女としての身体だって。こんな身体でいいなら、いくらだってセックスさせてやる。そう思っていた。自身も、結構楽しんでいる事は、秘密だが。

「ここは、あまりお気に召さない」と

「……当然でしょう」

さっさとどっかに行け、と目で言うカミーラ。これ以上、こんな破廉恥な格好、見られたくは無かった。

「……は。……何を、……えっ？」

急に手を掴まれ、そのまま連れ去られるカミーラ。会場を出ると、エレベーターへ。上層階の、宿泊施設へと、エレベーターは上っていく。

「何をなさるのですか。無断で会場を出るなんて」

「あそこに居なくなかったんだらう？ だったらいつまでも居ない方がいい」

中佐の言葉に、呆れるカミーラ。あなたとは立場が違うんです、と言おうとしたが、無駄だろうと思った。中佐は、そういう男なのだ。

「で、どこへ向かうんです」

そう言う間も無く、抱き寄せられて、唇を奪われる。何を、と言う言葉は出なかった。カミーラも、そのキスを受け入れたからだ。

「ん……」

男の腕に抱かれ、身体を預けながら、舌を絡め、甘い声を出して、口紅が落ちるのも構わず、二人はディープキスを繰り返すのだった。



「はあ……、はあ……、はあ……」

びゅく……びゅくん……、びゅっ……

膣内に感じる、射精の感触。激しいセックスに、汗で濡れたドレスが、肌に張り付く。肩紐がずらされ、乳房を露出した恰好。下げられた下着は、足首に引っ掛かったまま。ハイヒールを履いた足が、天井に向かって伸び、男の腰に絡み付いていた。

「凄く興奮したよ……大尉」

未だ、びゅくん、びゅくん、と切なそうに射精を繰り返す男。よほど興奮したらしい。いつもは、堅苦しい軍服姿しか見た事が無いため、カミーラのドレス姿は、想像以上の破壊力だったようだ。

「もう………、汗で汚れてしまいました……」

かなり高級なドレスだが、もうこれでは、パーティーなど出れない。

『そんなに……、私が……』

部屋に着くなり、速攻で始めた二人。玄関で、服も脱がすにセックス。そのまま、数分で射精。その後も、少しずつベッドルームまで移動しながら、何度も何度も繋がり合った。ベッドに着く頃には、3度目の射精が終わっていた。余程興奮したらしい。

『いやらしい人………』

自分みたいな女に、ここまで欲情してくれる恋人が愛しい。正直、今日はパーティーに来てから、『綺麗だ』とか『可愛い』とか、『結婚しよう』とか、散々社交辞令を言われて、うんざりだったのだが、やはりその、愛しい男に、女らしい恰好を褒められるのは嬉しい。想像以上に。思わず自分も、ドレス姿のまま、いやらしく声を出したり、『愛してる』とか、『嬉しい』とかを連呼してしまった。現に今だって、ベッドに押し倒されて、天井に向かって大腿開いて、男のペニスを子宮まで押し込まれて、射精されてしまっている。今日は、安全日では無い。しかし、そんな事はどうでも良かった。産んでやる、中佐の子供を。孕みたい、あなたの子種を受精したい。そう強く思った。男を、深く愛していたから。

「こんな綺麗な君を、他の男になんか、見せたくない」

首筋にキスをし、耳元でそう囁く男。何て愛しいんだろうと、思う。これでは、自分も独占欲が出て来てしまうではないか。具体的に言うと、この人の妻になりたい。そして、他の女の事なんか考えられなくなる位、セックスしてセックスして、セックスしまくるのだ。一緒に家に住んで、毎日毎日、キスして、手を繋いで、一緒にお風呂に入って、同じベッドで寝る。それは、夢のような世界だった。

「今夜は、離さないよ」

至近距離で言われ、ぼー……っとする。もう、全てをあげたい。私を。そんな風に思う。もう、祝賀会の事など、どうでも良かった。後で大目玉を食らうだろうが、知った事じゃない。今、自分にあるのは、この男を愛している。この男に、抱かれまくりたい。セックスしまくって、精液を子宮に注ぎ込まれて、孕まされたい。この、愛しい男の子供を産むのだ。カミーラは、今まさに恋する乙女だった。

「エミル……っ」

カミーラは、男の頭を抱くと、唇を重ねた。



汗だくのドレスを脱ぐと、そのままシャワーを浴びる。デート用では無い、落ちやすい口紅を落とすと、鏡で髪を整える。激しいセックスで、滅茶苦茶になったヘアスタイルを戻し、バスルームを出る。バスタオルで身体を拭くと、ベッドルームへ。入れ違いで、狭いユニットバスに向かおうとする男を、カミーラの腕が掴む。頭を抱き寄せ、キス。即座に舌が口の中に入り込み、縦横無尽に動き回る。待てない、とでも言わんばかりに、男の身体に強く抱き付き、逃がさない。舌を絡め、乳房を押し付け、男を誘惑し、勃起させる。固くそそり立ったペニスが、カミーラの腹部に当たり、その熱さを伝える。

『そうよ……、欲情して……、私を犯して……！』

二人は、もつれ合うようにベッドに倒れ込み。そのまま激しい愛撫へと突入していった。

「ん……、あん……、んっ……」

仰向けになった男の股間に、カミーラが顔を寄せ、起立したペニスを、口で愛撫する。自然に覚えた、口を使った、オーラルセックス。以前は、知識すら無かったが、頭の良いカミーラである。すぐに、それを覚えた。愛する男が相手なら、フェラチオなどすぐにマスターする。それが、女という生き物だった。

「大きい……わ……、あ……ん……、固い……っ」

舌先と、唇で感じる、愛しい男のペニス。この大きい、グロテスクな形の性器が、あれ程の快楽を与えてくれるのだ。この、固さが、カリの段差が、奥まで届く、この長い陰茎が。もうカミーラは、愛しさで気絶しそうだった。

『ついさっき、あんなに射精したのに……何て愛しいの……！』

唇で、亀頭の先に吸い付き、れろれろと舌を動かしながら、勃起してくれるお礼、とでもばかりに、男の足に、ぶにゅぶにゅと乳房を押し付ける。そそり立った乳首が、くりくりと転がる感触。興奮しているので、大胆だった。普段ならば、服の上から胸を見られただけで、相手を睨み返すほどだ。母譲りの美貌と、グラマーな肉体を持つカミーラは、男からのいやらしい視線には、嫌悪感しか無かった。今の恋人に出会うまでは、恋をした事が無かったのだから。恋をすれば、女は淫らになる。それは、男も女も変わらなかった。

「君に入りたいって、俺のモノがそう言ってる」

「ん……、そうね……こんなに……」

カミーラは、淫らな瞳で、男の顔と、ペニスを交互に見る。もう、愛しさと興奮で、どうにかなりそうだった。

『こんなに……なって……。そんなに私を抱きたかったの……？』

中佐は、祝賀会などという慣れない場所で、居心地が悪そうにしている自分を、助けに来てくれたのだと感じた。さながら、白馬の王子のように。

『いやらしい人……』

性欲に支配された男が、愛しい。自分を、愛してくれていると感じるからだ。男の欲情に喜べない女など、生きる価値も無い。



「ん……、ふふ……っ？」

カミーラは、男の腰の上に、跨る。固く天に向かってそそり立ったペニスが、カミーラの下腹部に当たり、太腿に挟まる。

『あん……大っきい……』

むっちりとした太腿に挟まり、それでも亀頭が顔を出す程の、中佐の長いペニス。全部入ると、子宮にまで入りそうな勢いだった。

「中佐……」

はあ、はあ、と息を荒げながら、妖しい瞳で、男を見下ろす。仮にも、上司の上に乗り、跨っている。こんな無礼は、有り得ない。厳格な軍人であるカミーラは、その背徳感に、興奮した。

『犯して……？』

そう思いつつ、カミーラは、腰を浮かせて、中佐の勃起したペニスを、自分の中に、ゆっくりと挿入していった。

「はあっ……、はあっ……、はあ……あんっ……」

ぎっし、ぎっし、とベッドを軋ませながら、男の上で、腰を振るカミーラ。運動神経も抜群の彼女は、セックスのセンスも、テクニックも既に一流だった。愛しい男と、愛に溢れたセックスをしているのだ。自然と上達もする。好きな男の前ですら、マグロな女など、男に愛される資格は無い。

『気持ちいい……っ』

ぐい！ぐい！と前後に腰を振るカミーラ。突き込まれたペニスが、角度を変えながら、膣の中をぐちゅ！ぐちゅ！と出入りしていた。カリの段差が、カミーラの中の敏感な部分を擦り、体奥を突く。気持ち良さに、失神しそうになるが、何とか姿勢を保つ。状態が揺さ振られ、形の良い巨乳が、重力に引かれ、ぶるっ、ぶるっ、と揺れ動く。まるで、男を誘惑するかのよう。

「ああん、中佐あ……」

胸を、見られている。15歳も年上の男に。親にすら見せた事のない、成長した大人の女の乳房を。物凄く気持ち良かった。胸を見せて、男を誘惑するのが、こんなに気持ちが良いなんて。初めて会った時、軍服でも隠せないこの巨乳を、じっと見て感想を言われた事を思い出す。セクハラで訴えようかと思った。あの時は、まだ目の前の男を、愛していなかったのだから。

『私の胸を見て……、私のこの、大きくていやらしいおっぱい……！』

胸が大きいのは、正直コンプレックスだった。自分は、軍人である。娼婦では無いのだ。胸が大きくても、得する事など、人生で一度も無かった。

『胸が大きくて、こんなに良かったと思うのは、初めてだわ……！』

多くの男は、大きな胸が好きだという。中佐も、その例外では無いらしい。カミーラは、生まれて初めて、自分の巨乳が誇らしかった。



「興奮しているのかい？そんなに胸を見せて……。いやらしいな、大尉は」

「あん……、あなたのせいです……っ」

言われ、恥じらいつつも、興奮するカミーラ。好きな男に、おっぱいを見せて喜ぶ。そのどこがおかしいと言うのか。愛している相手になら、いくらだって淫らに誘惑したい。それが恋する女と言うものだった。それが出来ない女は、一生オナニーでもして、生きていくしか無いのだ。

「こんなにいやらしいおっぱいは、初めて見るよ。カミーラ……君は女神か、それとも悪魔だな」

ゾクゾクするカミーラ。そんな事を言われたのは、初めてだった。悪口とも取れないその言葉に、猛烈に興奮する。

「こんなに、俺を誘惑して、夢中にさせて……！」

男は、手を伸ばし、カミーラの胸を、両手で鷲掴みにする。

「あ……、ああんっ……！」

むにゅむにゅ！ぶるん！ぶるん！

男の大きな手で、乳房を愛撫されるカミーラ。好きな男からの、性感帯への刺激に、一気に興奮が爆発する。括約筋が締め、ペニスを締め上げる。無意識の行為だった。

『いっちゃう……！』

最近、一人で居ると、オナニーばかりしているカミーラは、絶頂の予感が分かった。あと数秒でイクと。男も、締め上げられ、そのまま前後に抜き差しされる愛撫に、絶頂に達しそうだった。

「イクよ……！カミーラ……！愛してる……！」

「わ、私も！愛してます中佐！ああんいく！エミル！いくわ！いくの！ああ！！だめえいく！！」

びくびくびくっ！！

男の上に跨ったまま、絶頂に達してしまうカミーラ。ほぼ同時に、男もいった。熟年カップルでも滅多に無い、同時イクだった。

繰り返される、甘く、淫らなセックス。もう、何度目になるのか。とっくに、日は変わっている。セックスをしては、そのまま果て、疲れ果てて、絡み合ったまま、裸で眠る。目を覚ますと、また甘い時間となり、激しくキス。身体を愛撫し合い、繋がりが合う。何度も何度も、腰を打ち付け、深くまで繋がりが合ったまま、獣のように、お互いの身体を貪る。ベッドを軋ませ、肌のぶつかり合う音を響かせながら、繰り返される、凄まじいピストン運動。軍人である、二人の体力。魅力溢れる、男と女のへの欲望。いつに無く、二人の愛は燃え上がり、淫らなセックスは、いつまでも続いた。

「エミル……、私……、もう……」

気力も、体力も限界のカミーラ。いくら、まだ若い24歳とはいえ、こうも続けると、倒れそうだった。

「君が魅力的なのがいけないんだろ……？なあ、カミーラ」

「あ……、ああん……、あなただって……！私をこんなに夢中にさせてえ……ああああっ！！」

窓辺で絡み合いながら、キスと愛撫を繰り返していた二人。高層ビルの窓ガラスに手を付きながら、背中を舌で攻められていたカミーラは、突然の挿入に、甘い声を出して、全身を仰け反らせる。もう日も変わり、ホテルの部屋に入ってから、11回目のセックスだった。

「ああ……！！ああ……ああ……
あんっ……！！」

ゆっくりと、長く、力強いストローク。繰り返される、セックスと射精で、敏感になった膣は、もうどんな甘い刺激にも、敏感に感じた。

「いくぅ……！！もうイクぅ……！！」

男の甘い刺激に、興奮し、自ら乳房をガラスに押し付け、その豊かな巨乳を押し潰し、揉み転がし、刺激する。びくん！！びくびく！！と、全身を痙攣させ、ものの数秒で、イってしまうカミーラ。

「いったのかい、カミーラ。感じやすいな」

「あなたとの……セックスよ……、イかない訳……無いわ……」

びくん、びくん、と痙攣を繰り返し、ゆっくりと動かされる腰に、カミーラ自身も、腰をぐねらせ、角度でペニスを撚り、刺激を与えていく。

「何て淫らなんだ……、ほら……見ているよ、皆……」

すぐ外には、街の夜景。ここは、一流ホテルの、高層階。窓はカーテンなど無く、外からは完全に、中が丸見えだった。

「ああん……、見られてる……、私達の……セックス……！！」

カミーラは、一糸纏わぬ裸だった。いくら部屋が暗い、深夜とは言え、赤外線カメラなどを使えば、その姿は、はっきりと見える筈だった。

「見られて、興奮しているのかい？エッチな女だな、君は……」

「ああん……言わないでえ……っ」

自分でも知らなかった、淫らな一面。今まで、性的な事など、全く興味が無かった。女としての美意識は、それなりに持っているし、身だしなみも心掛けて来た。しかし、こうして男を知るまでは、自分がここまで、愛する男との行為に、淫らに夢中になるとは、想像すらしていなかった。

『愛してるのよ……、そんなの当たり前だわ……！』

愛＝性欲だというのは、一般的な知識だった。自分には関係無いと思っていたが、恋をしてしまった今現在、それは自分にとって、命題となっていた。最近では、知的好奇心と、実用性から、ポルノなどを見て、研究している位である。恋をしている女が、セックスのテクニクを磨かないなど、怠慢である。マクロー女ほど、醜い女は居ないからだ。

「だって……、あなたを愛しているの……！ああんエミル、もっとセックスして……！私を犯して、射精して、世界中の人が見ている前で、あなたの子供を妊娠させてえ……！」

窓に張り付き、夜景を見ながら、男とのセックスを見られ、興奮するカミーラ。愛する男との、裸のセックスは、恥ずかしいどころか、むしろ誇らしかった。

「妊娠したいか、カミーラ」

「うん……！妊娠したい……！あなたの子種を、私の子宮で着床したいの……！」

妊娠のメカニズムは、知識で知っている。そんなの、子供でも知っている事だ。性教育で習ったからだ。しかしまさか、社会的義務である妊娠が、ここまで淫乱で、快楽に支配された世界だとは、全く知らなかった。

「妊娠したいのか？それとも、ただエロいセックスをしたいのか？どっちなんだカミーラ」

「ああん両方よ……！妊娠したいし、あなたの子供産みたい……！でも、いやらしいセックスも好き……！こんな風にあなたとセックスしたいの……！もっと……！もっと……！」

そう言いつつ、自らもガンガン腰を振りまくるカミーラ。ぶちゅぶちゅと、極太のペニスが、恐るべき勢いで、出入りを繰り返す。まるで、膣がペニスを犯している様だった。

「セックスって、子作りのためだろ……。なあ、どうやるんだ？子作りって、具体的に言ってみろ」

「あん……、こうやって……、あなたの……、ペニス……、膣に入れて……、動かして……」

淫らに腰を振りながら、男の誘導尋問に、自分から乗るカミーラ。もう、男の思うがままだった。頭が良く、プライドも高いカミーラだが、そんな男の挑発に、思わず乗ってしまっていた。興奮しているから、いけないと思いつつも、どんな言葉でも、ずらずらと出て来た。これまでの人生で、一度も発した事の無いような言葉でも、平然と言ってしまふ。

「チンポだよ、チンポ……、チンポがマンコに入ってるんだ、チンポをマンコに入れて動かして、気持ち良くなって精液を子宮に発射して、ザーメン注ぎ込むんだ。それがチンポセックスなんだよカミーラ」

「ああああん！！チンポ！チンポセックスう！！マンコにザーメン発射するチンポセックスう！！あああん興奮するう！！チンポ！チンポとマンコがセックスしてるう！！ついこの間まで処女だった私があ…！軍人なのにい……！国を守るために戦う、誇り高い戦士なのにい……！軍の上司である中佐のチンポとセックスしてるう——っ！！」

淫らな言葉を吐きながら、興奮していくカミーラ。頭が良いので、いくらでも言葉が出て来る。想像力も豊かなので、セックスの興奮は、どこまでも高められるのだ。

「チンポなんて言って……、あんなに俺の事、いやらしい、不潔って罵ってくれたくせに……！」

ぱん！ぱん！ぱん！ぱん！
いつの間にか、二人のセックスは、大きな音が部屋中に鳴り響く程、激しいものとなっていた。

「あん！あん！だって！あの頃はっ！恋なんて！知らなかったからっ！あんっ！」

ガラスに手を付かされ、外に向かって裸を見せ付けながら、さながらレイプのように、激しく犯されるカミーラ。そんな責め苦にも、大人のカミーラは、快感に満ちた、甘い声で応えた。好きな男に犯されて、最高に気持ち良くて、幸せだった。これがセックス。この幸福は、恋をしている女ならではの幸福。

「セックス好きなのか？カミーラ」

「好き！セックス好き！あんっ！あなたとのセックス！チンポセックス！セックス好きなお！あんっ！あんっ！ちんぽ！ちんぽ！ああんチンポお！エミルのボッキチンポ大好きなお——っ！！」

愛と欲望に支配された、淫らなセックス。それは、どこにでもある、普通の恋人同士の、愛の世界だった。

「俺達の、愛し合う姿、世界中に見せてやろうぜ……！！」

「ああああんエミルう！！愛してるわ！！愛してる！！セックスして！！セックス！！レイプして！！レイプして私にザーメンビュって発射して孕ませて！！妊娠させてええ——っ！！」

ぱん！ぱん！ぱん！ぱん！ぱん！ぱん！！

「いく！！カミーラ！！ほら、孕めっ！！あっ！！」

びゅっ！！
最後の一撃を打ち込み、そのまま射精する男。体奥に感じる、熱い射精の感触に感動し、カミーラは嬉しさで、そのままイってしまう。

「あはあん……エミルう……！！出て、ああん出て、ああ……！！妊娠しちゃう……っ」

びゅくんっ……！！びゅぐ……んっ……！！びゅっ……！！

止めども無く、注ぎ込まれる精液に、カミーラは、我を忘れて、快樂の高みを貪った。



「お早う御座います、中佐」

エミル中佐が、いつものように、5分程遅れて、執務室に入ってくる。そこには既に、カミーラ大尉がおり、雑用をこなしていた。

「やあ、今日も早いね」

「……………」

僅かに赤面し、中佐の言葉を見無視する大尉。早いも何も、今日も朝方まで、二人は一緒に居た。夜中まで、2人で愛し合い、セックスを繰り返していたのだ。5回は射精させたし、自身も、いった回数は数え切れない。完全に、恋人同士か、夫婦のセックスだった。

「……5分の遅刻です、中佐」

嫌味のように、ぼそつと言う大尉。しかし、以前と違い、怒ったりはしない。何故なら、遅刻の原因は、カミーラにもあるからだ。夜中の3時まで、セックスをしまくったのだ。中佐は、もう30代後半である。あんなに無理させては、次の日の仕事に、差し支えるのは明白だった。そこは、副官として、2回くらいで止めるべきだったのだ。

「……………」

無表情のまま、雑用をこなすカミーラ。しかし、先程から、同じ動作を繰り返しており、ちっとも進んでいない。動揺している様子が、何だか可愛かった。出会った当初は、冷徹な軍人と思わせたが、何の事は無い。ちょっと不器用な、若い女の子なのである。

「……何ですか」

自身の動揺を悟られたのを察したのか、むっとして、抗議の意思を示す大尉。そんな所も、また可愛い。

「では、俺も仕事をしようか」

「そうして下さい」

ようやくやる気になった中佐に、大尉は、僅かに微笑む。こんな笑顔は、恋仲になるまで、見た事は無かった。二人きりで、ベッドに居る時でさえ、滅多に笑わない女なのだから。

「あの、中佐。出来れば少し離れて…」

すぐ近くまで来る中佐。何だろう、と思う間も無く、カミーラ大尉は、その身体を抱かれ、唇を奪われる。

「ん……………っ！」

何をする、とばかりに、目を見開き、押し退けようとするが、やがてとろんとした目になり、身体から力が抜ける。唇を離すと、倒れそうになる大尉を、腕で支える。

「こういう事は……………っ、その……。ここでは……………」

怒るかと思いきや、悪い気はしないらしい大尉。その目は、『もう終わりなの？もっとして…』と言っているようでもあった。

二人は、距離を取ると、今度は真面目に、仕事を始めた。

その後も、中佐と、その副官は、執務室の扉が閉じられると、二人っきりになるのをいい事に、隙を見てはキスをし、抱き合う。セックスこそしなかったが、一日20回は、大人のキスをし、ちゅっちゅべろべろを繰り返すのだった。



「あんっ……！あんっ……！あんっ……！！」

休日。今日はどこかに出掛けようかと、合流する二人。しかし、気合を入れてめかしこんで来た、カミーラの服装が、あまりに可愛く、セクシーだったため、速攻で始めてしまった。昼間から、カーテンも閉めずに、セックスである。

「ああん……！何か……！なんか凄い……っ！」

ベッドの上で、いつもとは違う興奮に、甘い声を出すカミーラ。普段は、抱き合う時は、夜が多かった。例え昼間でも、夕方ぐらいであり、ここまで朝日の差し込む、早朝という事は、有り得なかった。初めての体験に、新鮮な興奮を感じるカミーラ。

「やはり、明るい所だと……君の美しさが際立つよ、カミーラ」

腰を振りながら、濡れまくるカミーラの陰に、ペニスを滑り込ませ、責め立てる。たくし上げられたキャミソール。外されたブラジャーから零れ落ちる巨乳が、美しい弧を描いて揺れていた。

「ああん……！あなたも……！ステキよ……！ああん
エミルう……！！」

屈強な軍人の肉体が、朝日に照らされて、その形を際立たせる。カミーラも、女。逞しい男には、見惚れてしまう。愛しい男であれば、それは尚更だった。

服をぼぼ着たまま、ソファで1回。ガーター stockings を履いたまま、姿見の前で一回。そして、僅かに休憩した後、再び始める。今度は、衣服を全て脱ぎ捨てて、お互い裸になって、ベッドの上でのセックスだった。熱く、甘い愛撫を、たっぷり一時間は繰り返し、興奮が最高潮に達した所で、ゆっくりと繋がりが合った。

「ああ………ああ——………っ」

カミーラは、自分の中に、侵入して来る、愛しい男のペニスの感触に、感動し、涙を流した。

「すき………」

そう呟くと、そこからは、ひたすら甘い声を出して、絶叫するのみだった。あまりの興奮に、もう言葉を発する事が出来ず、獣のように、腰を振り、涎を垂らし、乳房を揺らし、セックスの快楽に身を任せ、狂ったように泣き叫ぶだけだった。

「あ……、あ……！あ——っ！！！！」

びゅくん！！びゅくん！！びゅくんっ！！
陰の奥の、子宮目掛けて、射精される感触。その熱い感触に、カミーラは、今日何度目かの、絶頂を迎えた。

「……もう………夕方です……」

男の胸に、頭を乗せながら、カミーラは呟く。外は、夕暮れに紅く染まっていた。結局、3度目のセックスの後、そのまま6時間ほど眠ってしまい、起きたら夕方近くだった。そして、シャワーを浴びた後、またセックスをした。優しく、それでいて淫らな、スローセックスによるプレイは、疲れはしなかったものの、その官能的な愛撫や、疼く様な甘い刺激、繰り返し紡がれる、愛の言葉など、我を忘れて、腰を打ち付け合う激しいプレイよりも、ずっとずっと興奮した。

「帰りにたくない……」

男の身体に、ぎゅっと抱き付き、子供みたいに甘える。

「ずっと……あなたと一緒に居たいんです……。我儘でしょうか」

カミーラは、軍人の家系に育った、良家のお嬢様である。軍人としての一生を送る事を、義務付けられた、エリート中のエリートだった。自分で、将来を決める権限は無い。

「結婚しようか」

これまで、何度も出て来た言葉。主に、セックスの最中に、プレイの一環として、『中出し』『妊娠』『種付け』『孕む』などと一緒に、結婚という言葉も、よく使われた。『一生、セックスしまくる関係で居る』という意味合いだった。色々、興奮する言葉はあるが、『妻になる』という言葉が、カミーラが最も興奮する言葉だった。そんな事は、夢であり、妄想の産物。現実には、実現するのは困難であると思われたからだ。

「無理に決まっています……」

カミーラは、そう呟く。もう、自分が中佐を監視するために派遣された、という事実は告白していた。二人の関係も、上層部には、完全にバレているだろう。カミーラは、軍人である。今でこそ、中佐の副官として、傍に居る事が許されているが、いずれは、転属などもあるだろう。そうなれば、もう一緒に居る事は難しい。転属先が、すぐ会えるような場所とは、限らないからだ。

「俺は、君と離れたくない」

「…私だって」

二人は、熱い瞳で、見詰め合う。『愛してる』と、その瞳は、語っていた。二人は、再び甘いキスを始め、そのまま愛撫に入ってしまった。今日、5度目のセックスだった。

その後、カミーラは、何だかんだありつつ、6年間、エミル中佐の副官を務めた。優秀な副官として。頼りになる秘書として。そして、男を癒す、甘い恋人として、常に傍に控え続けた。優秀な彼女は、順調に昇進。やがて、少佐にまで出世すると、自分の部隊を任される。その頃には、もう副官の任を解かれていたが、配属先は、同じ第三小隊だった。『もし、中佐と会えないような遠方に飛ばされたら、辞職する』と、転属を告げる上司に、堂々と言い放ったからだ。当然、彼女の親類は怒ったが、『家族の縁を切る』と脅迫され、何とか落ち着いた。可愛い娘は大事だし、やはり家族としては、幸せになって欲しいと思っているからだ。何せ、カミーラの両親も、恋愛結婚だったのだから。

カミーラが31歳になる頃、二人は結婚した。一緒に住むようになった以外は、特にそれまでと変わらず、普通に軍務に就いていた。

やがて、二人の階級は、同じ中佐になっていた。

カミーラが妊娠すると、彼女は退役する。妻として、母として、人生の全てを捧げる事を、決心していたので、未練は無かった。彼女の母も、出世はしなかったものの、元は軍人であり、娘の決めた事だからと、反対する親族に、便宜を図ってくれた。

その後、カミーラは、エミル中佐の良き妻として、子供たちの良き母として、穏やかな一生を送った。母親になる頃には、カミーラは、別人かと思う程、穏やかで、優しい母親となっていた。

『副官、カミーラ・フローリッヒ大尉／終』



『あんっ……！あんっ……！あんっ……！』

真っ暗な部屋の中で、男の上に跨り、腰を振るカミーラ。その様子を、暗視カメラで覗き見ている、男達。全身黒づくめの、怪しい集団。それは、軍の特殊機密を主にする、機動部隊だった。表向きは、存在していない筈の部隊である。

『ターゲットを確認。女と一緒に。予定に無いが』

『構わん。女も一緒に始末しろ』

『いいのか、フローリッヒ家のご令嬢だぞ』

『どうせ目撃者は家族もろとも全て始末する計画だ。貴族の一つや二つ消えた所で、何の支障も無い』

謎の声は、通信機から、黒づくめの男達に対し、作戦実行の命令を出した。

バンッ！

プラスチック爆弾が、頑丈なマンションの扉を木っ端みじんに破壊する。同時に、何かが投げ込まれ、辺り一面が、真っ白になる。目くらましの閃光弾だった。愛しい相手との幸福な快樂の世界に浸っていたカミーラは、それが襲撃だと即座に気付いたが、反応が遅れた。やはり、動物は交尾をしている時、無防備なのだ。

バタバタと、数人の男が土足で室内に乱入。カミーラは、枕の下に隠した拳銃を取ろうと、手を伸ばす。しかし、男達は精鋭揃いの特殊部隊。いくらカミーラでも、撃退は難しかった。室内に、フラッシュライトのような明かりが、激しく点滅した。それは、機関銃の銃口から出る、マズルフラッシュの光りだった。

ベッドの上で、繋がりが合っていた男と女に、銃弾の雨が降り注ぐ。ターゲットは男だったが、こんな近くに居ては、一緒に居る女も、無事では済まない。その女の命は奪うな、という命令は出ていない。それどころか、不穏分子として、処分が検討されていた程だ。元々、男の動向を探るために、スパイとして派遣されて来たという経緯があった。しかし、共に過ごすうち、このようにベッドを共にするような関係になっていた。完全に籠絡された女は、命令を無視するようになっていたのだ。

「あっ、あ……！ ああ、あ……！！」

大量の銃弾を身体に浴びながら、それでも抵抗し、男を守ろうと、手を伸ばす。しかし、何発もの銃弾が、彼女の身体を貫き、視神経の指揮系統を奪う。女は、ただ男の上に跨り、降り注ぐ銃弾の雨を、身体に浴び続けるだけだった。



『中佐……………』

裸体で、銃弾を浴び続ける女、カミーラ大尉は、薄れ行く意識の中で、自分が処分されるのだと理解した。今、繋がりが合っている相手、エミル中佐は、不穏分子として、以前より当局から、邪魔者扱いされていたのだから。今のカミーラは、それを弁護する立場にまで、思想が変化していたのだ。一緒に処分される可能性など、いくらでもあった。

『私が……………私がこの人の……………盾にならないと……………』

降り注ぐ、銃弾の嵐。何発かが、カミーラの頭部を、貫通する。脳細胞が破壊された状態でも、深い忠誠心と、男への愛が、カミーラを奮い立たせていた。

パスッ！ ビンビシッ！ パスパスパスッ！

鉛の球が、女の柔肌に、容赦なく穴を開けていく。柔らかい三の腕を、むっちりとした太腿を。男を誘惑し、欲情させる、女の肉体。魅力的な女であるカミーラは、上司であるエミル中佐を夢中にさせ、肉体関係となっていた。一流の軍人でありながら、ポルノ女優並みのエロボディを持つカミーラ。その豊かな乳房が、銃弾を貫通させ、その度にぶるん！と悩ましく揺れる。襲撃者の男達は、カミーラの裸体に銃弾を撃ち込みながら、全員が勃起していた。

やがて、激しい銃撃の音が止む。辺りには、静寂と、硝煙の匂いが支配した。

ザアア——……

マンションの一室の、狭いバスルーム。そこに、シャワーの音が鳴り響く。全裸の女が、壁に背を持たれ掛け、その身体を犯されていた。

「くうー、可愛いぜ……っ！こんなエロい女が、ウチの軍に居たなんてな……！」

既に絶命した、カミーラ大尉が、襲撃者の男に、その裸体を晒し、犯されるがまになっている。身体中に空いた、銃弾の跡。それは、頭部にも、首にも、胸にも、痛々しい銃創を残し、血を滲ませている。なん十発もの銃弾を受け、即死だったカミーラ大尉は、出血も多く、その身体を洗う為に、バスルームへと連れて来られた。男達の、趣味である。実際、隣室ではターゲットである男が、そのままの姿で、死体袋へと入れられている作業の最中だった。

「すっげー可愛い……！噂には聞いてたけど、フローリッヒのお嬢様って、こんな美女だったんだな。しかも、データによると、ついこの間まで処女だったんだろ？サイコーだぜ」

何人もの男が、死体となった無残なカミーラ大尉の身体を、犯していた。シャワーを浴び、血が洗い流されたカミーラの裸体は、無残でありながらも、儚げな美しさを醸し出していた。男達は、特殊な性癖を持つ、隠密部隊。普通の人間にな出来ない事をやらされるため、その性格は、異常者が多かった。非人道的な任務が大半を占めるので、まともな性格の人間には、務まらないのだ。故に、こういった者も多く居るのが現状だった。

「ああ……！エロい……！オッパイエロい……！
でけーオッパイに穴空いてるぜ！カミーラ大尉！」

カミーラの身体を犯しながら、これ見よがしに乳房を揺らして見せる男。何発かの銃弾は、カミーラの柔らかい、弾力溢れる乳房を貫通し、痛々しい大穴を開けていた。しかし、殺人鬼でもあり、ネクロフィリアの性質を持つ男は、こういった破壊された、女の死体が大好きだった。仕事中、気に入った女を見つけると、生きていようと死んでいようと、お構い無しに犯す。それは、他の男達も同じだった。

「ああいく！いく！出るっ！まだ一人の男しか知らないカミーラお嬢様のエロい身体に精子ビュッと出さず！ほら！オッパイ揺れてる！エロいオッパイ！さっきまで男の前でタブタブ揺らしながら誘惑してたオッパイ！真面目なエリート軍人が、隠れて上司とあんな事してよ！お仕置きに殺してセックスして中出ししてやるぜっ！ああ！あ——っ！！」

びゅるっ！！びゅっ！びゅっ……！
男は、物言わぬカミーラ大尉の死体に、容赦無く大量の精液を吐き出し、冷たくなった膣内を、生暖かい精液で満たしていくのだった。

その後、エミル中佐とその副官、カミーラ大尉は、事故死として処理された。陰謀の渦巻く、軍では良くある事で、誰も気に留めなかった。

カミーラ大尉の、死体映像は、記録として残され、一部のマニアの間に回る。

『カミーラ大尉じゃねーか…！死んだのか？陰謀？』

『俺、ファンだったのに……、ああ、エロい身体……！おっぱいでけっと思ってたんだよな。この人処女？』

『ああ……！チンポ立つ……！カミーラ大尉のオッパイ……！ああ出る！精子出る！』

軍事マニアの間で、『フリーリッヒ家のご令嬢、クールな美女、カミーラ大尉』として、(宣伝のために)雑誌などに載り、有名だった彼女は、多くのマニア達を喜ばせ、オナニーのズリネタとして、オタク達の精液を搾り取っていくのだった。

























Reminder that translations are not only welcome,
they are in demand!

提醒一下，不仅欢迎翻译，
他们很抢手！

翻訳を歓迎するだけでなく、
彼らは需要があります！

번역도 환영합니다
그들은 수요가 있습니다!